

「子安観音と秩父巡礼＝志津・井野とその周辺の女人講石造物」

蕨 由美

はじめに

成田街道の加賀清水へ古道入り口のたたずむ「成田山道」道標、ここから北東へ、ユーカーが丘の市街を経て井野の旧村へ行くと、古刹稲野山千手院があります。

佐倉市や八千代市の旧村では、ムラ行事としての地域祭祀を支え、ムラ内の親睦をはかる様々な講中があり、ウブスナを祀る氏子中をはじめ、若者組（現代は祭礼の若衆や消防団）、出羽三山講、庚申講などがあり、その一部は今でも続いています。

また、女性の講では、「十九夜講」や「子安講」そして「秩父講」が、「女人講」として続いている地区もあります。女人講は、伝統を踏まえながらも時代に合わせて変遷しており、昭和初期以前のことは不明なことが多いのですが、幸い、寺社や路傍にたつ石造物群の調査から、江戸初期から現代にいたる旧村の女人講の姿を追うことができます。

まずは、加賀清水公園脇の稲荷神社の子安塔と秩父巡拝塔群、そして千手院の参道のおびただしい十九夜塔や秩父巡礼塔群を眺めながら、女人講とムラにおける女性の役割を考えていきたいと思います。

第1部 志津・井野の旧村を訪ねて

(1) 井野とその周辺の名所・史跡

- ①井野＝成田街道の「七代目市川団十郎の道標」・常夜燈、加賀清水、八社大神・井野城跡・千手院
- ②先崎＝鷲神社（本殿・鳥居・祭礼）・先崎地藏尊
- ③青菅＝旧青菅分校 ④小竹＝小竹城跡・西福寺 ⑤上座＝宝樹院（サザンカ）

(2) 道しるべを兼ねた路傍の秩父巡拝塔

- ①小竹三叉路の聖観音像秩父巡拝塔道標（文久元年 1861）
- ②井野の聖観音像秩父巡拝塔道標（安政 6 年 1859）
- ③小竹中台三差路の秩父巡拝塔道標（明治 33 年 1900）

(3) 子安塔・十九夜塔と秩父巡拝塔群の風景

- ①井野の稲荷神社＝子安塔 6 基（万延元年～昭和 32 年）・秩父坂東善光寺巡拝塔 3 基（昭和 17～39 年）
- ②井野の千手院＝十九夜塔 13 基（元文元年～昭和 46 年）うち 7 基は子安像塔・子安塔 2 基（現代）・秩父三十四番供養塔 8 基（明治 41 年～平成 13 年）

第2部 女人講石塔の変遷史

(1) 念仏講に集う女性たち

江戸時代の初めのころ、ムラには、共同体の二世安樂を祈る念仏読誦の講が盛んであり、女性たちも「女（房衆）念仏講」に集い、地藏菩薩などさまざまな主尊を拝み、また庚申講でも主体的な役割を果たすこともあった。

- ①香取市貝塚の来迎寺境内の個人の墓地内には、天正 4 年（1576）銘の宝篋印塔がある。善女人 10

余人が二世安楽を願って「三年一座」の「守庚申」の庚申行事を行った主旨の銘があり、「善女等」の銘から、女人講の石塔としては、現在、北総最古とされ(*1)、平成27年7月に香取市文化財に指定された。

②佐倉市先崎には慶安3年(1650)建立の石像の地藏坐像がある。「庚申」の銘から庚申信仰の証しとされ、「女人」銘や女性名はないが、「先崎地藏尊」と呼ばれ、「子育て地藏」として女性たちに篤く信仰されてきた石仏である。

③八千代市米本の寛文10年(1670)銘の地藏像塔には、「女房衆念仏講同行二十三人」の銘があり、安産子育ての地藏として伝えられてきた。

④佐倉市志津報恩寺の貞享2年(1685)建立銘の念仏塔には「善女人念仏供養造立如意輪菩薩像也」の銘が刻まれている。

⑤佐倉市土浮正福寺の如意輪観音像塔には「奉新造立時念仏并拾九夜供養・・・」と彫られていて、元禄4年(1691)建立時でもまだ「時念仏」と未分化であったと推測される。

⑥佐倉市生谷梵天塚脇の元禄16年(1703)建立銘の念仏塔には、「奉造立聖如意輪観世音／尊像惣(村)／為女念仏講菩提也・・・」の銘があり、「女念仏講」の建立である。

(2)「女念仏」から十九夜塔の盛隆へ

旧暦19日の夜、女性が寺や当番の家に集まって、講を開き、如意輪観音の前で経文、真言や和讃を唱える行事を「十九夜講」と呼び、十九夜講が、祈願の信仰対象あるいは成就のあかしとして建立する石塔が「十九夜塔」である。主に、右手を右ほほに当て首をかしげ、右ひざを立てて座る姿の如意輪観音像が主尊として彫刻されている。

茨城県側の利根川対岸では、万治元年(1658)如意輪観音像を線彫りした「十九夜念仏」塔が利根町徳満寺に造立された。

千葉県で、「十九夜念仏供養 二世安楽」などの銘文と、如意輪観音浮彫像を刻んだ典型的な十九夜塔が盛んに建てられるようになるのは、寛文5年(1665)印西市(小倉青年館)からで、寛文年間には浮彫や丸彫、六臂や二臂の如意輪観音像塔が多数建てられていく。北総では、江戸前・中期(17～18世紀)で1500基、幕末までには約二千基もの十九夜塔が建立され、江戸中期のころ、女人講の石塔として如意輪観音像を刻む十九夜塔は、関東北東部を席卷していった(*2)。

これらの如意輪観音像の像容は 二臂像では、左手を膝に下げたポーズから、江戸中期後半には、左手に蓮華を持つ姿に変わっていく。

- ・二臂像の如意輪観音像＝寛文12年(1672)臼井田常楽寺の十九夜塔
- ・六臂の如意輪観音像＝享保14年(1729)青菅正福寺の十九夜塔
- ・蓮華を持つ二臂如意輪観音像＝宝暦10年(1760)先崎雲祥寺の十九夜塔・安永6年(1777)臼井台実蔵院の十九夜塔・文化5年(1808)生谷専栄寺の十九夜塔・文化9年(1812)上座宝樹院の十九夜塔

(3)十九夜塔の主尊は なぜ如意輪観音なのか

十九夜塔建立主体の十九夜講では、「十九夜念仏和讃」を唱えた。これは、毎月十九日に集まって、十九夜念仏を唱えれば、血の池地獄に堕ちた女人を如意輪観音が救済してくださるという信仰である。

「血の池地獄」とは、「血盆経」という室町時代に中国から伝来した差別的な偽経に出てくる地獄の

ことで、月経とお産で流す血の穢れから女性が逃れられない恐ろしい死後の世界とされる (*3)。

当初の十九夜講は、ムラとイエの現世安楽、来世での先祖と自分達女人救済を祈願する「十九夜念仏」の性格が強かったが、江戸後期には、安産子育ての現世利益を祈願する性格が強くなり、やがて「子安講」へと移行していった。

(4) 子安講の石造物

安産・子育て・子授けを祈願する女性の子安講が建てる子安塔は、「子安大明神」銘の子安神石祠と、主尊が乳幼児を抱く像容を刻んだ子安像塔に大別される。

千葉県内で最古の子安塔は、袖ヶ浦市百目木子安神社の「子安大明神」元禄 4 年 (1691) 銘の子安像塔である (*4)。

北総では、元禄 16 年 (1703) の八千代市上高野子安神社の「子安大明神」文字銘の石祠が古く、佐倉市でも、小竹四社明神の元文 4 年(1739)の「子安大明神」石祠など、子安像塔にやや先行して現れる。

子安像塔は江戸中期後半から普及し始め、その本尊は「子安大明神」銘のほか、「十九夜講」や「子安観音」銘が見られるようになる。

佐倉市での子安像塔の初出は、内田妙宣寺の宝暦 6 年 (1756) 銘。また大佐倉麻賀多神社の天明 3 年 (1783) は「子安大明神」銘、井野千手院の寛政 3 年 (1791) は「十九夜」銘で、それぞれ子安像を浮彫りする。

江戸後期には、さまざまな像容の子安像塔が建てられ、幕末から近代になると、如意輪観音像の十九夜塔に代って、印旛・東総地域の女人講石造物のほとんどを占めるようになる。

現在も佐倉・八千代市内では、造塔が行われているが、東葛地域では、市川以西の江戸川流域での子安像塔建立はほとんど見られず、船橋市古作町熊野神社の明治 20 年 (1887) 子安像塔が最西端である。

- ① 「子安神」石祠＝宝暦 8 年(1758)上座熊野神社・宝暦 9 年(1759)井野八社宮
- ② 子安坐像塔＝寛政 12 年 (1800) 飯野観音・享和元年 (1801) 大蛇町 神明神社・文政 2 年 (1819) 山崎竹内前弁天様・文政 7 年 (1824) 大篠塚麻賀多神社・嘉永 4 年 (1851) 飯重大宮神社・安政 4 年 (1857) 臼井台 342 付近・慶応 3 年 (1867) 青菅正福寺
- ③ 子安立像塔＝寛政 3 年(1791) 先崎雲祥寺・文化 8 年 (1811) 角来 八幡神社・文化 8 年 (1811) 本佐倉妙見社
- ④ 近代～現代の典型的な子安像塔＝明治 33 年 (1900) 船橋市金堀町竜蔵院・大正 8 年 (1919) 白井市復仏法寺・平成 21 年 (2009) 生谷専栄寺

(5) 現代の子安講

子安講は安産・子育ての神仏である「子安様」を祀る若奥さんの講である。信仰的な集まりであるが、農繁期でもかならずお嫁さんを出席させることになっていて、昔からお嫁さんたちの息抜きの場であり、骨休めのレクリエーションでもあった。

八千代市下高野のように十九夜講の伝統を継ぐムラの子安講の場合は、「十九夜講」の名称のまま、毎月 19 日に開かれることが多いが、最近はその前後の週末に行われるようになり、場所も本来の当番宅からムラの集会所や寺院で行っている。

戦後の第 2 次ベビーブーム期までは、どの地区も子供たちも多く、会場が母子であふれるほどであったという。

八千代市麦丸では、当番は朝、寺社境内の子安塔に香華を手向け、料理（最近はお弁当か茶菓子のみ）を準備し、本尊の子安像の掛け軸を掛けて、灯明を供える。この灯明の燃えさしは、お産が軽く済むようと妊婦が持ち帰る。毎月の儀礼は子安講の「ハナミ」（「ハツセ」）唄の唱和と直会であるが、新春の「子安びしゃ」では、当番の交代の儀礼をおこなう（*5）。

(5) 子安講の終焉から秩父講へ

昨今の旧村では、少子化が顕著に進み、ムラの講としての子安講は、継続も難しくなっている。

成田街道沿いの大和田円光院の女人講石塔群を見ると、昭和 32 年建立の平石型に記念碑に近い子安塔を建立、これ以降、大和田の子安講は秩父講に変わっていき、昭和 36 年～平成 14 年まで 6 基の参拝碑が建てられている（*6）。

江戸期・十九夜講⇒近代・子安講⇒現代・秩父講と変わっていく円光院の石塔群にみるムラの女人講の変遷は、また、成田街道沿いに八千代から佐倉にかけての傾向でもある。

(6) 秩父巡礼に出るたくましい女性たち

江戸中期の明和 3 年（1766）には、佐倉市臼井台実蔵院に「奉造立秩父三十四番女人為二世安樂也臼井墓町女講中」銘の如意輪観音像塔が建てられ、その後、幕末までに佐倉市内では約 46 基の秩父三十四観音霊場供養塔が相次いで建立されている。

佐倉市直弥の宝金剛寺には、天保 6 年（1835）から明治 31 年（1898）まで 5 基の秩父巡拝塔がある。そのうち天保 6 年塔には、「秩父同行三十二輩／直弥村願主利右エ門妻／同村五人／寒風村六人・・・」の銘があり、近隣六か村 32 人が誘い合って、秩父巡礼をはたしたのである。

さらに、弘化 6 年（1849）塔には、「米戸村 市右エ門母 源右エ門母 直弥村 新七母」など七か村 16 人の「母」たちと、「下勝田村重右エ門隠居」の 17 人が列記されている。

佐倉市近辺の地域の女人講では、秩父三十四観音霊場を巡拝する秩父講が、子育ての終わった世代で盛んになり、「女一生の給金」、現代では「子育て卒業旅行」などと称し、積極的に行われている（*7）。

特に近代になって鉄道網に敷設が進み、中年男性の出羽三山講の「奥州まいり」（出羽三山拝）が盛んになっておびたしい出羽三山碑がムラの梵天塚に林立することと並行して、ムラの女性たちの秩父巡礼もますます盛んになり、その記念として、明治から現代までの、佐倉市内のムラの寺社境内には、267 基以上の女人講による秩父講碑が建てられ続けている。

男たちの奥州参りに負けず劣らず、秩父や坂東の観音霊場巡りの長い旅に出かけて行ったムラの中年女性たちのその姿には、能動的なたくまじさが感じられる。

(7) 近～現代の秩父巡礼の姿

①「秩父・坂東観音霊場巡礼今昔」（八千代市高津の事例 2005 年 *8）

「高津の女性たちは、一生に 1 回、秩父 34 ヶ所観音霊場巡礼に参加した。数年から十年ぐらいのサイクルで団体巡礼が企画され、その際の機会をなるべく逃さないよう心がける。同行の仲間は「組」とよばれ、一生のおつきあいとなることも多い。

秩父巡礼は 2 泊 3 日の行程を貸し切りバスで、坂東 33 ヶ所観音霊場は 1 泊 2 日で廻るが、坂東は範囲が広いので 3 年で一巡する。2005 年は坂東の 2 年目で春休み中の 3 月 25～26 日に廻る準備をしていた。今回は 18 名参加の申し込みがあり、一人 38000 円ほどの費用を負担する。

女性なら年齢にかかわらず誰でも参加できるが、かつては旅費もかかるので、小遣いを貯めたり、息子にヨメをむかえてシュウトになってから行かせてもらったとも。また息子が兵隊に行くイエの人は、無事帰ってくるよう、必ず参加したとのこと。

昔は、和服にそろいの道行きコートを着て手ぬぐいをかけ、ついでに三峰や佐渡へ足を延ばしたこともあったらしい。「ハダシタビ」（地下足袋）や「わらぞうり」を履いていったこともあったとか。イヘイさんのおばあさんのお話では、途中でわらぞうりの後が切れて道の石を跳ねてしまい、その石が着物の長いたもとに入って重かったという笑い話もあった。

またしばらく前までは普段着に袖なしの白衣をはおったりしていたが、現在では歩きやすい普段着の上に紺や赤、緑の輪袈裟をかけるだけの姿で、また観音経と般若心経の経本を持参する。先達は昔から男性で、鈴木信司氏が、ここ毎回勤めてくださっている。

同じく男性が一生に一回の出羽三山を巡る「奥州参り」の後には、記念の供養塔を建てる慣しがあるが、女性の秩父・坂東巡礼では建てたことはない。

そのかわり、観音堂の中には向かって左の壁の上に、昭和四年（1929）五月十五日銘のりっぱな秩父参拝絵馬が奉納されている。嶋田髷を結って紋付の正装をした女性 20 人とザンギリ頭の先達 2 人が祈る姿が描かれて、左下に先達 2 人女性 20 名同行者の名前が記載されている。

現在は、秩父・坂東巡礼の記念写真を額に入れて観音堂の右壁の鴨居に上に飾っている。

一番古いのは、年号が入っていないが、昭和 25 年の女性 23 名の写真で、参加者名は屋号。全員和服にそろいの道行きを着て手ぬぐいを首に掛け、下駄履き姿である。このときは佐倉駅の駅長さんが事前からいろいろ世話をしてくださり、佐倉駅から巡礼専用列車で秩父に向かったと参加したイヘイさんのおばあさんがお話ししてくれた。

次は、昭和 38 年 4 月 20 日 16 名、続いて昭和 43 年 4 月 15 日 25 名の写真で全員和服。昭和 49 年 3 月 29 日 27 名の写真は、雪の残る秩父 13 番慈眼寺での撮影、このころから洋装となっている。以上、いずれも先達は 1 名である。

それ以降はしばらく間をおいて、平成 13 年 3 月 25 日 21 名（内男性 1 名）、秩父札所 24 番法泉寺でのカラー写真となる。その十年ぐらい前（平成の初めごろ？）と見られる 36 名のカラー写真は、高津に帰ってから、袖なしの白衣を着けて観音堂の前で撮った写真。また昨年平成 14 年 3 月 10 日 25 名参加の坂東三十三観音巡りの写真も帰ってから観音堂での撮影である。

4 月と 8 月の観音のオコモリに集まった念仏講のおばあさんがたは、写真を見ながら他界した同じ組の仲間のことも懐かしく思いだしつつ、秩父の話に花を咲かせる。秩父巡礼は、女性の人生経験の中で大きなイベントであったようである。」

②近代の秩父巡礼行程の事例

下志津報恩寺の大正 9 年 1920 建立の秩父三十四番供養塔の銘文（読み下し文）

「秩父参拾四番供養塔

大正九年四月五日、佐倉駅に出て（下志津から）成田・滑川・佐原を経て香取に達し、三社（香取・鹿島・息栖か？）巡拝す。潮来を過り、牛堀に至り、霞ヶ浦を渡り、土浦・下北條より筑波・足尾・加波の三名山に登り、雨引（観音）に泊る。翌日は笠間（稻荷神社）に詣り、岩瀬に帰り、小山から宇都宮に達し、日光の東照宮の結構（趣向を凝らした建物）を鑑賞し、中禅寺・二荒山神社を拝み、中禅寺七湖を渡り、山を攀じ登り、雪を蹴って足尾銅山の鉱業を観察し、伊勢崎・高崎・前橋・磯部と経過し

て、**長野の善光寺**を参詣。反転して**熊谷寺**の桜を観て、十三日には**秩父**に到着し**大宮・三峯神社**をはじめ五日間を要して**三十四番札所**を悉く巡礼し終わった。更に**熊谷**から**川越・八王子下橋本**を過り、健脚にまかせて七里、**大山**(阿夫利) **神社**に登拝して、**平塚**に出て、**藤沢**を経て**江ノ島**の風景を賞で、**片瀬**から**鎌倉の名所旧蹟**を訪ね、**横須賀**を見ながら海路、**金沢八景**を眺望しつつ**横浜**に到着し、**川崎大師**を拝んで**東京**に着いた。東京では一泊して、先ず**宮城**を拝み、**靖国神社**をはじめ諸所の名跡や神社仏閣を巡拝鑑賞して、二十二日、**両国駅**より汽車に乗り**四街道駅**に下車して帰郷した。此の間、日を費やすこと十八日。その巡礼旅行の地域は、**一府七県**にわたったのである。翌二十三日、一同は**春日神社**に集合してお祓いを受け無事巡拝を終えた報告をかねてお祭りを行いお互いの健脚を祝いあった。

大正九年五月吉日 建立 先達 松戸鉄太郎 同 松戸 とく 榎澤 とよ 横山 きく 仲臺 いそ 榎澤 志ん行 川崎 ちち 岩井 とみ 仲村 ふか」

⑤ 参考：奥州参り行程の事例

八千代市萱田町薬師寺の昭和9年(1934)建立の出羽三山塔の銘文(*9)

「昭和九年七月二十日此ノ日コソ吾等同行十七名奥州三山参拝團ノ出發ノ日ナリ世相ヤトモスレバ唯物觀ニ立チ我國古來ノ敬神崇ノ祖ノ傳統的精神ヲ輕視スル風生ジタルガ如シ然レドモ帝國ノ國ノ威隆々トシテ國際間ニ重キヲナスハ神道宗教ヨリ享ケタル牢固ノ國民的信念ニ負フ所大ナルモノアリト信ズコレ町内有志コノノ擧ニ出テシ所以ナリ路ヲ**成田土浦**ニトリ常州廣野ニ兀立セル**筑ノ波ノ景勝**ヲ探リ或ハ勤王ノ發祥地トモ言フベキ**水戸**ノ遺風ヲ欽ノ仰シ**大洗**ニ洋々ノ水モテ身ヲ淨メ**青葉ノ城**ヲ追憶シ**俳星**ノ辞ナノカリシ**松ノ翠島**ヲ遊覽二十三**日三山下大仙坊**ニ入り翌二十四日ノ早朝出發**三山**ヲ参拝修行ノ尊キ體驗ヲ得タリ二十六日**善光寺坊**ノ入翌日本縣ノ偉人日蓮宗祖ノ開キ給ヒシ**身延山久遠寺**ニ参拝二ノ十八日関東唯一ノ御陵**多摩御陵**ニ皇國ノ隆昌加護ヲ祈願シ午后ノ六時一同無恙歸町此ノ行程九日ナリ記して記念トス / 昭和九年十二月吉日建之 / 大和田小學校長 小野徳次郎 選」

おわりに

江戸時代から戦前までの近世・近代のムラの女性たちは、「罪深き五障三従のあさましき身」(「蓮如上人御文」と仏教的にも蔑視され、さらにイエ制度の中では家父長に従うものとされてきました。

しかし、江戸前期の石造物から見ると、念仏講の中でも女性たちは主体的であり、ムラ社会の中で女人講の結束は一目置かれ、ムラの大事業であった石塔建立では男・女別の講が同年同日にペアで石塔を建てる(例：八千代市吉橋の寛文8年の二十三夜塔と日記念仏塔)など対等の地位が与えられていました。

ムラの中での女性たちは一定の役割を持って共同体の一員として活躍し、男女の差もなく遇されていました。農村・漁村・町場の庶民層の女性たちは、男性に劣らずよく働き、その主婦権は、一部上層の家の婦人とは比べようもなく強固であった(*10)といわれます。

江戸後期の文化文政期ごろからの女人講は、「血の池地獄」に落ちないように念仏する「女人成仏」信仰からの解放を求めるように、神道系の祭祀であった子安神信仰を取り入れて「子安講」へと脱皮していきます。

産み盛りのヨメ(ムスメ)は、イエと地域から子を産み育てることを期待され、さらに、子育てを終わると「卒業記念旅行」として、秩父巡拝の旅を共にし、さらに結束を深めていきました。

ムラの祭礼行事では、女性たちに役割がありました。田植えに際しては若い女性たちが「早乙女」と

して出仕し、各イエの祝い事では子安講の女性たちが「ハナミ」を歌いにいき、「テントウネンブツ」やトムライ、追善行事では念仏講の女性たちが念仏を唱えにいくなどの役割を、つい最近まで果たしていました。

古来、女性の持つ霊力がムラ共同体を守っていると信じられ、女性たちはムラの安泰を祈り、その祭祀を司る重要な役割があったと思われます。

参考資料：

- *1 早川正司 2013「小見川来迎寺の天正銘宝篋印塔」『日本の石仏』145号 日本石仏協会
- *2 石田年子 2015「下総地方の十九夜塔」『日本の石仏』153号 日本石仏協会
- *3 榎本正三 1992『女人哀歓－利根川べりの女人信仰』崙書房
- *4 蕨由美 2010～2012「北総の子安像塔の系譜＝江戸時代中期におけるその出現と成立について」他『房総の石仏』第20～22号 房総石造文化財研究会
- *5 蕨由美「春の女人講行事『麦丸の子安ビシヤ』」2016『史談八千代』第41号 八千代市郷土歴史研究会
- *6 蕨由美「大和田・萱田町のムラの講の石造物」2017 『史談八千代』第42号 八千代市郷土歴史研究会
- *7 石田年子「林立する女たちの秩父巡拝塔・下総中央部 4市の事例-」『日本の石仏』No.156 2015 日本石仏協会
- *8 蕨由美「高津の女人信仰の民俗 - 子安講・秩父参り・念仏講・観音堂のすがた - 」『史談八千代』第30号 2005年)
- *9 蕨由美「大和田・萱田町のムラの講の石造物」『史談八千代』第42号 2017年
- *10 西海賢二 2012『江戸の女人講と福祉活動』 臨川書店

*その他参考 Web サイト

「佐倉市の石碑・石仏」<http://sakuranosekihi.web.fc2.com/index.html>

「佐倉でよく見かける参拝供養塔・巡拝塔について」<http://sekihioshirase.web.fc2.com/teireikai.pdf>

(参考)「秩父三十四箇所」 Wikipedia から要約

秩父三十四箇所とは、埼玉県秩父地方にある 34 か所の観音霊場の総称。ここを巡ることを、秩父札所巡りという。西国三十三所、坂東三十三箇所と併せて日本百観音に数えられ、結願したら長野市の善光寺に参るのが慣例となっている。

秩父三十四箇所の起源については 1234 年（文暦元年）の甲午年 3 月 18 日説があり、「新編武蔵風土記稿」にもその記述が見られ、室町時代の後期には秩父札所が定着していたと考えられている。その後、16 世紀後半に百観音信仰の風潮がおこり、西国・坂東に比べて歴史が浅く地域的にも増設の条件にも恵まれた秩父の札所が増設されて 34 ヶ所になり、番付も江戸からの参拝者の便を考えて現行の番付になったと考えられている。